

わが愛する歌

—名歌鑑賞—

庄司久恵

くろくろと水満ち水のうち合へる死者満ちてわがとこしへの川

竹山 広

竹山広の第一歌集『とこしへの川』（昭和五十六年版）所収。

竹山広は昭和二十年八月九日長崎で被爆した。その日退院する竹山を迎えるために、浦上第一病院に向っていた兄は閃光を浴びて死んだ。戦後十年経ち、作歌を再開し、原爆詠を試みた。それから更に二十六年が過ぎ、歌集「とこしへの川」に原爆詠を収めている。この時彼は六十一歳を迎えている。長い間封印されていた被爆の体験は、彼の心の中で反芻され成熟し、素朴な簡潔さを保ち、動かし難い形を作りあげていった。人間の姿が正確無比に描かれている。

・まぶた閉ざしやりたる兄をかたはらに兄が残しし粥をすすりき

歳月を経てなお現在そのものごとく体験はうたわれる。掲出歌の上句のリアルな眼差しに慄然とするが読み返すうちに、悲苦をうかべて、何時までも何處までも流れつづける川とは、人間の長く経てきた時間、すなわち歴史だと思われてくる。「死者満ちてわがとこしへの川」の韻律に耳を傾けるなら、鎮魂の祈りの声が聞こえてくる。死者が「使者」にかわっていることも気付かされるのである。

・病み重なる地球の声のきこゆると云はしめてただ神は見たまふ

卷頭言

台風十八号の影響で外は激しい雨。私は何をするとともに無く外を眺めながら、ふと若い頃に歩いた奈良の芋峠の野仏や夏に行った鋸山の磨崖仏を思った。あの仏達は今激しい雨の中に身を晒しながら、ひっそりと佇んで居るのである。人知れず何百年の歴史を刻みながら、風雨や炎天を佇み続ける野仏や磨崖仏に私は言い知れぬいとおしさを感じた。西村公朝は「祈りの造形」（日本放送出版協会）の中で、「私にとりましては、この道端で苔むしている石仏こそ、まさに如の世界観をあらわしているといえるのです。お堂にまつられている仏像よりも、この方がはるかに大きなスケールです。周囲の景色そのものが仏殿なのですから。そして、石仏の前にある雑草や花こそ、自然の供物といえましょう。」と述べている。私はこの文章に強く心引かれる。人々に珍重され崇められる仏像よりも、天然自然の中で自在に姿を変化させながら佇み続ける仏像こそ私は美しいと思う。阿部先生は私の最初の歌集「能登」の扉の写真に大切にしていっちゃった野仏の拓本をくださった。そのお心は正にこの西村公朝の文章に凝縮されているのではあるまいか。そしてそれはそのまま歌人としての心構えを私にくださったのだと、今にしてしみじみ思う。阿部先生は、繰り返しおっしゃった。「歌人に素人も玄人もない。真に大切なのは、どれ程良い歌を作ったか。真に感動にあたいする歌を作ったか。それが歌人の全てなのだ。」と。それは私に野仏の様な歌人になれと先生が暗に諭されたことなのであった。

（高崎）

太陽の舟 目次

三十一巻十一月号（通巻二九九号）

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司 久恵

巻頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

木村百合子

阿部正路論（第九十七回）

須藤 宏明

歌誌散見（第七十三回）

豊泉 豪

作品Ⅰ

飯塚 裕子 他

九月批評（作品Ⅰ）

山名 恒子

合 評（座談会）

岡部千代松

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌拔芳（二九七号）

森本 元昭・上田やい子

作品Ⅱ

高崎 邦彦

文法講座（十二）

角田 順子 他

追悼 金子泰太郎氏

奥田 清

追悼 藤井 武徳氏

三木 勝

作歌の目・作歌の技法（第五十八回）

松岡 三夫

歌帖余白座（七十一）

山田（紀）・多久和・松岡

歌会・支部報告 他

山田（紀）・多久和・松岡

編集後記

山田（紀）・多久和・松岡

表紙

イラスト 阿部正冬

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

秋思

木村百合子

佇みて茜雲見るゆふまぐれ心重たきひと日暮れ行く

山深き狭間に揺るる藤袴滅び行くとふ花の幽けさ

寂しきもの持たざるごとく咲き盛る土手の曼珠沙華赤く続けり

山の辺に風冷えびえと吹き渡り果肉をさらすあけび揺らせり

部屋ぬちに葉の斑の揺るる昼を居り心たぎつこと訪れざらむ

散りかさむ落葉踏み行く城跡に滅びしものの咳しはぶきを聴く

残照に染まる山路の風冷えてかそけく木の実降りて来るなり

秋の陽の白き日向に少女ゐてさびさびと吹く鳩笛の音

ひそやかに秋来たるらむ一陣の風の中にも詩うたのありたり

ひたひたと地を打つ雨の中を来て傘たたむとき木屋こぼるる

秋風の沁み渡る朝沙羅の木に溜息のごとき返り花咲く

山間を流るる小さきせせらぎもいつしか秋の声となりたり

晩秋の日射し伸び来て戯れる小鳥の影畳に写す

秋空をクレヨン画ほどにあはあはと飛行機雲は伸びて行くなり

夕茜白く射したる木の幹をつかみしまの蟬の抜け殻

吾が心放ち蜻蛉あきつの舞ふを見る季の移ろひゆるやかにして

そこはかとはろけきものを呼び起こす夕風の中のつくつくぼふし

秋陽射す塀を這ひ行く蝸牛でむしのはつか残せる銀のすぢ跡

華やぎの記憶を辿る旅にして飛驒路は深き秋色に染む

君に名を呼ばれし気配振り向けばからまつ林に風通り行く

さやさやとからまつは金色きんの葉を落す言葉あ少なきひとと吾の背に

山深く故郷の墓鎮もれり風に落葉の匂ふたまゆら

山鳥はひそと落葉を踏み歩く母眠り給ふ墓のほとりを

母の墓に淡く夕陽は残りゐてひぐらしの声透り行くなり

うろこ雲流るる夕辺どの雲に昇天の母抛より給へるや

阿部正路論（第九十七回）

阿部正路論

須藤 宏 明

— 浪漫的叙景歌 —

近代歌壇の成立を、阿部正路は、正岡子規と落合直文が世を去った明治三十五年・三十六年付近に置いている。阿部は、その頃の「明星」の台頭と、三十六年に伊藤左千夫が「馬酔木」を創刊したことに、歌壇の成立を見ている（『和歌文学発生史論』楓桜社・昭和五十二年・五七一頁）。ここで注目すべきは、「二大政党的な「明星」と「アララギ」の併存に対して、「明星」を脱退した相馬御風らの「白百合」の創刊、金子薫園を中心とした「白菊会」の結成を重視している点にある。この動きを、

「明星」派に対立して「清純な浪漫的叙景歌」を標榜し
てのことであった。

と、阿部は指摘する。つまり、近代歌壇の成立の根幹は、写生による叙景歌と、抒情を主体とした浪漫派の歌の対立にあるという阿部の見解である。歌壇における政治的構造と、脈々と流れる和歌史を熟知した阿部の文学史観による卓越した論考である。大正以後の歌壇の興隆は一つの絶頂期であるが、この要因は融合にあるのではなく、対立にあるという史論な

のである。

阿部のこの論考で残された問題は、「浪漫的叙景歌」という捉え方である。これは、具体的にはどういうことを言うのか。それは、阿部が伊藤左千夫に対して「浪漫的な左千夫の歌」と言う評価に、「浪漫的叙景歌」の思惟が含まれているのではないだろうか。これを鑑みるにあたり、阿部が東北大学に内地留学した時の東北大の国文科の教授である、写生説を深く論究した北住敏夫の言説が参考になる。北住は、左千夫の「青空にい通ふ山の中つへに緋の雲立てり千重のみち葉」の歌に対して、

表現の著しい様式化が見られると同時に、「青空にい通ふ」といふあたりには、浪漫的な心情が看取せられるであらう。（『写生派歌人の研究』明治書院・昭和四十九年・七十三頁）

と解説し、このような左千夫の歌は「鮮かに清澄な感覚もさることながら、それを浸してゐる耽美的な感情をこそ汲みとるべきである。」と述べている。北住の言う「浪漫的な心情」「耽美的な感情」という要素が、阿部の言う「浪漫的叙景歌」に相当すると考えられる。左千夫の「青空にい通ふ」の「い通ふ」という表現には、作者の定まらぬ心持が表象されていると読める。自然に対して、自己の心情を託して詠み、叙景された歌の表現に作者の心情が読まれること、これが「浪漫的叙景歌」ではなからうか。このような手法は、左千夫が独自に作ったのではなく、「明星」との切磋琢磨の中で、形成されたことを、阿部は短歌史の観点から論説しているのである。

歌誌散見 第七十三回

豊 泉 豪

「くれない」③

前号に続き、「くれない」二〇〇九年七月号と八月号より、短歌作品を鑑賞する。

・花に葉に宿る昨夜のあめしづくノウゼンカズラ命新し

玉城 洋子

雨あがりの朝に咲く花の美しさを歌っているが、単に美しいのではなく、「命新し」としているところに注目したい。清められて命が新しくなることで、何度でも再生を繰り返すという考え方は、日本人独特の精神性によるものであろう。真夏の花から、作者もまた新たな一日に向かう力を得ている。・仇を打つさまに手の蚊を叩きやりふともたじろぐ己が行為に

玉城 寛子

「血の雨」一六首中の一首である。一連の前半には、沖繩の〈慰霊の日〉に祈り、戦争の惨劇を描き、不戦を誓い、米軍駐留の現状に抗議する歌が並ぶ。掲出歌は日常詠や時事詠となる後半の二首目に置かれている。多くの争いの始まりは「仇をうつ」ここから始まる。戦争を憎み、「ふたたびの戦さあらさじ」と歌う作者が、ふとたじろいだ自らの行為。〈歌う〉ことは〈訴う〉ことだと言うが、その根底に厳しく深く自らに向き合う姿勢がなければ、人のこころを〈打つ〉こと

はできない。そうした意味では、一連の前半に置かれた作の意義を深める歌でもあると思う。

・真夜中に吹き出る蝦蟇の呻き声ちちの刺したる兵士の声か
仲沢 照美

もしかしたら具体的な事実を背景として作られた歌ではないのかも知れないが、仮にフィクションであったとしても、この歌の価値は変わらない。戦争において行われたあまたの殺人。その〈罪〉に、自分も決して無関係ではありえないということを歌っているのだろう。第二句の表現「吹き出る」に一考の余地があるだろうか。

・どの窓もカーテンをひくマンションの見られることの不安は満ちて
伊志嶺節子

第三句を「マンションに」あるいは、第五句を「不安に満ちて」とすればつながりが良いのではないか。外から見られることを恐れ、どの部屋もカーテンを閉めている。内側はひとまずそれで安心できるのかもしれないが、同じ一連の「通るたび高層ビルのどの部屋か姿見えない犬に吠えられ」のように、逆にその隙間から誰かが自分を覗き、狙っているかも知れないという恐怖が外側に生まれる。過剰に覆い、隠し、閉ざされていく現代の生活、社会を歌った作である。

短歌で社会や歴史を動かすことはできないが、真剣に自己に向き合い、あるいは深い思索を通して生み出され、さらに磨かれた言葉には、人の心を揺さぶる力が確かにある。改めてそのようなことを考えさせられた。「くれない」の項、了

九月批評（作品Ⅰ）

山名 恒子

・嵯峨野風さやかにわたり大沢の池の伽藍はさざなみのなか

奥田 清

嵯峨天皇が造営された嵯峨院の苑池の一部で今は大覚寺の境内にあり洞庭湖になぞらえて庭湖とも言われる広々とした池で詠まれた歌。大陸的雰囲気漂わせるわが国最古の庭園の一つと知ればおのずから風景が目に浮かび、風の匂や伽藍の美しさまで見えるのが、歌の力というもののなのでしょう。

・葉の蔭に小さき命生まれるて蟬の青さの滴るばかり

木村百合子

生まれたばかりの蟬の頼りなさ、透きとおる体の新鮮さを、青さの滴るばかりと表現されたことに驚き感嘆しました。

・言いがたき安らぎのあり二日ほど空けたるわが家の座り心地は

黒羽 絃子

愉しく喜んで出席した全国大会から帰られた時の歌。遠方の友にも会い語り、短歌も詠み、無事に終り、わが家に帰った時の安堵感には実に、言いがたきやすらぎ、と私も感じました。作者はまず仏壇の前に座られたのだと思いました。

・となり家の鶏きょうも時つくる力を出せと言ふが如くに

塩田 秋子

鶏は孟嘗君の故事にある通り高々と刻を告げるのが本来の役目。その声を、ともすれば萎えようとする心を奮い立たせ

てくれるもの、として聞いておられる作者。病をえることはそれほどに切ないものだ、思いの至らなさにはっと気付かされた歌です。旧かな使いでは、きょうはけふ、時つくるは時つくるのミスプリントでしょうか。

・一息に慶良間が海に溶け出して潜りて我も魚となりぬ

鈴木美智子

夏の記憶と題された歌。沖縄本島南端摩文仁の丘のはるか西の海に浮かぶ慶良間列島が、暑さのせい、空の青さのせいか、一息に海に溶け出して我も魚となりぬと詠われる、不思議な感覚が魅力となって清々しく読みました。

・夏至過ぎて色を増しゆく早苗田に落日の影水に写らず

杉山 榮子

季節の移ろいを的確に捉えて詠まれ、見事だと思います。早苗は日々伸びては肥り水田を覆う。もはや落日の影さえ映さないという。そこには力強い緑が生い茂り、着々と実りの秋へと準備がなされる。後戻りは無いのだという作者の決意を感じて、エールを送りたいと思いました。写は映では如何？

・吾の命継ぎし孫生る 注射器にほとばしり出づ吾の血の熱し

高崎 邦彦

命を継いでくれる者の誕生に感動され、その感動が、今採血されている血が熱いと言わしめる、しかもその血は、注射器にほとばしり出るほどの命の漲りと熱情を持っているのです。感動の大きさが、生る、熱しと二句とも言い切り、上下の句の間を空けてあるのも効果的だと思いました。

九月批評（作品Ⅱ）

岡部千代松

・いり海の波とは違ふおほ海の大きさ激しさ 小さく佇む

中村 陽子

「九十九里浜」の冒頭歌ですが、オーシャンの大きく激しい波を眼の前にし、自然界の壮大さに驚嘆されている様子が窺えます。結句の「小さく佇む」はその対比で効果的だと思います。

・雨やまず空し一時友の通ひ来たりて心和みぬ

永野 昌子

はじめとした梅雨時の雨は、何となく空虚で鬱陶しいものです。そんな時、来訪の友との会話はさぞかし盛り上がったことでしょう。心の和みがよく理解できます。

・くろぐろと黴の寄りたる吾の手を久に帰省の息子は見つめをり

原武 寿子

久し振りに帰省された息子さんの視線を的確にとらえた上手な歌と思いました。案外、子も親のことは気に掛けているものです。一寸した動作をも見逃さない親心が素晴らしいと思います。

・歩みより走りと変はる日の流れ亡母の齢まで心して生きむ

深谷 充代

年毎に日々が経つのが速く感じます。この実感を、「歩みより走り」の表現は面白いと思いました。また、「亡きお母さん

の齢まで心して生きようとの心構えには頭が下がります。

・ひと握りの刺激ほしくてデパートの人混みのなか逆ひ歩む

福地 啓子

確かに、平凡で変化のない日常が退屈で、一寸した刺激が欲しい時があります。デパートの人混みの流れを逆行する程度は許されるでしょう。同感できる面白い歌と思いました。

・円卓の顔はそれぞれの歳ささみ健康なるが何よりの価値

宮井 富美

「誕生日祝ぐ」の中の一首ですが、円卓を囲んでいる皆さんの長寿でお元氣な姿が目につかびます。健康に勝るものはありません。「何よりの価値」とは正にその通りだと思えます。喜びに満ちた楽しい歌と思いました。

・老いゆくを危ふしと思ふ日々あれど作歌の自由無限大にて

山田 玲子

誰もが歳をとってゆき、体力の衰えや、年金・医療・介護などのことを考えると心配になります。作者の気持ちにはよく分かります。そんな時、作歌に取り組むのは素晴らしいことだと思います。作者の短歌への大いなる意欲を感じました。

・真新し松の湯舟露天の湯仰ぐ大樹にリス渡りゆく

よしだ ゆきお

松の香り、自然界を展望できる露天風呂、たっぷりの湯につかった作者のリラックスした様子が想像できます。大樹のリスにもその雰囲気がよく出ています。安らぎを覚え気分よくなる上手な歌と思いました。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は九月号から四首を選んで行います。最初は月の船支部の伊藤モト会員の

寄せ返す波をしんみり見ておればリズムとりつつ海の呼吸かです。如何でしょうか。

Q 「しんみり」見るとは、しみじみ・静かによく見るということ、方言のようでもあり、素朴で心ひかれる言葉です。短歌ではあまり使われていないようですが、この歌には如何なものでしょうか。「リズムとりつつ海の呼吸か」は生き生きとして新鮮な表現だとは思いますが。

K 「しんみり」は無いほうが良い。歌の中に異質な感じのものが入っている気がする。

H 素直な若さを感じる歌ですけど「何何すれば、何何だ」という詠みかたは、説明的だから避けたいと思っているし、そう教わってきたし、見えるから詠むのであって、一寸、うるさい感じがします。

B 私は「しんみり」は使っても良いと思うし「見る」も作者が強調したいのだろうから良いと思う。ただし「れば」はいけないね。しんみりと見たのなら、それが心にどう響いたかを下句で詠まないと。下句は上句を進化させるものでなければならぬのです。

K 「リズム」と「海の呼吸」は同じことを言っている。

B そうです。上句と下句の連関がうまくいっていないので、「リズム」を取り、時間とか場所の名前を要れると良いです。結句の「か」は露骨な感じがするけど。

K 「か」は詠嘆の助詞ですね。疑問の「か」ではないです。でも「か」を使わないで結句を閉じたいですね。

E では、次は品川支部の久保田昭江会員の疎ましき事がら多きこれの世に季をたがはず梔子の咲くです。如何でしょうか。

H 今年の梅雨は長かったですね。八月になっても梅雨が明けなくて、崖崩れで老人ホームの人が何人も亡くなったり、地震があったり、夏山で遭難したり災害が続きました。それを「疎ましき事がら多き」と詠んでいて、下句に暗さやうつとうしさを吹き払うように咲いている白い梔子の花をもってきている、上手いなあと思いました。清潔感のある花ですのもの。

Q この通りだと思います。今の世の中には自然界も人間界も嫌わしい遠ざけたい事が多過ぎますが、季を間違えないで四季は移り、梔子も香り高く白い花を咲かせている。「これの世」はご一考あればと思いました。梔子の花は上句との連繋がよく奏功していると思います。

K 率直に言うと、類想歌が多いな、という気がする。やはり、歌を作る時は類想歌を避けるのが第一条件だと思う。

B 「これの世」は変です。「今の世」とか「平成に」というふうに、現代を表す言葉をいれなくては。

K 具体的に「平成に」としたら、大分印象が違ってきます。

B 今回の世の中にどんなことが起ころうとも、自然は変わりなく花を咲かせている。作者の言いたいところですね。

E なにげなく詠んでいて、作者らしい歌ですね。

E 三首目は、柏支部の多久和玲子会員の

帯解くるさまに白波ひくみぎわひとりゆく男の足あとを消す
を取り上げます。どなたからでもどうぞ。

Q 白波の引いていく様子を「帯解くるさまに白波ひく」とは、美しい叙情的な表現で素晴らしいと思います。「みぎわ」も静かで情感があるし、その波が「一人ゆく男性の足あとを消す」

のも、実際そうでしょう、思い出を偲ぶ気持ちも伝わってきます。古風な日本的な詩情が美しく詠まれた作品と思います。

H 上句から読んですんなり通りますか。主語は波ですか。

B 充分、通りますよ。この歌は静かでおやかな海の様子を詠んでいる。それでいて艶めかしくて雨情の世界を髣髴とさせます。なんとも言えない叙情の世界です。言葉の美しさが際立っていて上手いです。秀歌ですね。

H 「男」と書いて「ひと」と読ませていて、一字余りになっているので一寸、気になりましたね。

B このままで良いと思いますよ。

K 微妙な歌ですね。

H かすかにセクシャルな感じもしますね。

B 女性の美と男性の孤独とがうまく合っている。男性は亡くなったご主人のことかな。

Q 絵が見えるような歌で、作者のほのかな情熱を感じます。

E 四首目は、千葉支部の吉田昌夫会員の

梅雨けむる汀を歩む本須賀の左千夫を偲び玉はいづこに
です。どなたからでも。

Q 「玉はいづこに」の玉がよく解りませんでした。「玉」とは、大切な美しい金石のようなものであり、伊藤左千夫のことであると思ったが、短歌に詠み込んである「玉」とは知りませんでした。

K 私はインターネットで「本須賀」でひいたら、左千夫の歌碑が出てきたのでわかったんですね。

B 結句の「玉はいづこに」はあまりに唐突なんです。この歌は本須賀（成東海岸）にある左千夫の歌碑の歌「天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の浜に玉拾ひ居り」を本歌にしています。「玉」とは石のことです。

K 本歌を知らなければわからない歌ですね。

B 本歌取りは難しいです。この歌の場合「玉」としないで「石」としたほうが解りやすい。「左千夫の拾ひし石探しをり」ではどうでしょうか。

H 私も「玉」が解りませんでしたね。女の人の名前かと勘違いしてしまいました。

B 本歌を解らない読み手にも、ある程度わかる歌にしていなくては。左千夫の歌を知っている人は良いけど、知らない人が多いと思うのでね。

E 本日はありがとうございました。

（記録・山田紀子）

選者 岩橋千代子

野はいつも友なり師なり惑ひもつ耳にやはらかき土の声き
く

玉川 愛子

物的に欲しいものなど何もない追はれぬ心のゆとりを望む

浅見 時子

目を閉じて雨音を聴くゆったりと明日へ流れる時がいとし
い

井上萬里子

☆沙羅白く咲く庭にきて荒びしは雲をみやげのはたた鳴神

木村恵美子

ひとかたに草なぎ倒し流れたる豪雨のあとに夏つばめ翔ぶ

末次 房江

☆腕の中百面相の自在さに無垢なる小さき命いとほし

高崎 邦彦

倅せは変はらず寄せくる波のごと今かと思ふ友とのつとひ

角田 順子

入り交じる色をいろとし波立ちて大海原の懐遠し

中村 陽子

決心をいともたやすく次々と変える人こそ舵のない舟

三木 勝

子供らの声を遊ばせ家々の夕餉の準備の心地よき音

森本 元昭

選者 武田 節子

木もれ陽は光の素描^{デッサン}やはらかく時にかげりて独りゆく道

玉川 愛子

乳色の霧の途切れて澄み渡るお釜は深き地底湖の色

上田やい子

☆沙羅白く咲く庭に来て荒びしは雲をみやげのはたた鳴神

木村恵美子

伐られたる松の匂いを運びくる風に音なし風に色なし

小林 絢子

☆帰宅願望に揺るる老夫を置き帰る吾は鬼かとひそかに傷む

月田 藤枝

妻と娘の口を効かざる二三日われ漬け物の味を褒めつつ

長須 正文

さびしさも悲しみも又歌として佇み歩く夕暮の庭

二反田 實

狩野川の土手抜ける風梅雨晴れて緑の波の光まばゆし

森田 勝昭

梅雨空にはまゆうの花白白と丈高くしてひらき初めたり

諸 幸子

☆碧き水透きて岩立つ積丹の海へとなだるキスゲの黄色

山名 恒子

選者 森本 元昭

峰からの風ひんやりと背に肩に蔵王の神の降り来る気配

上田やい子

皺みきて細々伸びしよ生命線てのひら窄めもう少し伸ばす

川村 貴美

☆雨止みて白き夏雲湧き出づるぬめぬめ歩む蝸牛ひとつ

木村百合子

大久保^(地名)の大正昭和の医家守り薬におう伯母百二歳

鈴木 薫子

☆腕の中百面相の自在さに無垢なる小さき命いとほし

高崎 邦彦

☆帰宅願望に揺るる老夫を置き帰る吾は鬼かとひそかに傷む

月田 藤枝

山峡の里に棚引く朝霧は仏の渡らふ天空の道^{おおぞら}

梶野 落

たんぽぽが背伸びを競い風待ちて綿帽子飛び立つ時をうかがう

堀井 英範

我が歌^{かい}会の長老の君七夕に天寿を迎え天に昇りぬ

森田 勝昭

老いゆくを危ふしと思ふ日々あれど作歌の自由無限大にて

選者 上田やい子

「見えますか」仏間のカーテン全開に姫姿羅満開亡夫に見

せたく
今井 芳枝

小指の下きっかり一本の結婚線深々とあり大正の女

川村 貴美

☆雨止みて白き夏雲湧き出づるぬめぬめ歩む蝸牛ひとつ

木村百合子

瑠璃色の器へあまた散らばれり銀に光れるシラスの目玉

熊谷 香織

白いシャツ中で身体が泳いでる中学一年衣替えの朝

村田 一江

☆碧き水透きて岩立つ積丹の海へとなだるキスゲの黄色

山名 恒子

幼き日吾が背に負いし弟の軽き骨箱そっと抱きぬ

湯本 いと

酸素ボンベ引きて参加の堀井さんさわやか賞です歌のあか

るさ
宮島マツエ

灰色の濃淡の景はるかにて天を支ふる九十九里浜

庄司 久恵

雨光る九十九里浜にわれは見し伊藤左千夫の玉拾ふ背を

松岡 三夫

ふたたびの細ぼそと歩む旅路にて賜りしものただあり
がたき 玉川 愛子

巻頭二十五首「ふたたびの旅」が発表された事を私は真実うれしく思う。医者でありながら長く病気に苦しみ、「誰もるぬ診療室に三年半の空白のありひつそりと佇つ」と天与の仕事をもまもらぬ日々を過ごした。その間「心病むことは地獄なき旅路なりその日暮しの色のない旅」を続け、「看とらるる立場を知りて長病める人の哀しみ深く想ひぬ」「生かされてゐしといふ事気づかされ病みてはじめて知る祈りあり」と深く深く自己の内面を掘り下げる苦しい自己内省を繰り返す。それを支えたのは夫であった。共に医者として生きた夫は作者にとって最高の師であり理解者であり、心の支えであつたろう。「不ぞろひの野菜と味噌の少し濃き夫のつくりし汁にやすらぐ」。この間作者が得たものの大きさは、到底私の想像の及ばぬものである。そして作者はハンセン病の療養所「全生園」を尋ね、謂れなき偏見に晒されて苦しみ生きた人々と会い自らを逆照射する。他者は自分を写す鏡。分かっているにもかかわらず出来ない。しかし自らの厳しい内省の中で苦しみ抜いた作者には、理不尽に苦しめられた人々の悲しみや怒りは手に取る様に分かつたであらう。拔芳歌はそんな作者の到達した究極の境地。私は作者のこ

の境地に心から拍手を送りたい。更に特筆すべき事は、これ程の苦しみの中にあつて、作者は短歌を失わなかった事だ。短歌を読み続けた事だ。私はその事を何よりも尊いと思うし、阿部先生の教える見事さにも感動している。

娘と吾の誕生日近づく緑濃き七月よ来よ感謝し生きむ

渥美 崇子

作者は白寿を幾つ越えられたのだろうか。私は作者の歌を読みながら、いつも心打たれるのは、作者の歌が常に感謝の心を含んでいる事。長く生きた事を、生かされていると感謝し続ける作者の内面の美しさこそ、長寿の秘訣なのかと納得させられる。きっと今年も娘さんと御一緒に暖かい誕生日を迎えられた事であらう。真実いつまでもお元気で歌を詠み続けてほしいと願う。

置きざりの恋のかけらを拾ふ時星の祭りのデネブ輝く

石塚 立子

「デネブ」とは白鳥座の尾の位置にある恒星。一等星。恒星としては最大級の明るさを持つ。こゝと座のベガ、わし座のアルタイルと結んで「夏の大三角形」を造る。作者にとって、恋の想い出は星と共にあるのであらう。その星々の中から恋の一かけらを拾う時に、沢山の夏の夜空の星々の中で最も明かるく夜空に君臨するデネブは星の祭りの主役である。あるいは恋のかけらは実際の夏祭

前々号 (297 号) 秀歌拔芳

りの想い出の中にあるのかもしれない。

この頃は栗鼠も蝶々も可愛くない家庭菜園見回して気づく
今井 芳枝

「夫」き後 (二) は、夫を亡くした後の生活と心の変化を詠んで胸を打つ。その中でも拔芳歌、自らの心の変化に自分自身戸惑っている様子が、具象だけで表現し得て見事。夫と協力して作った家庭菜園。今も変わらず見回っているが、二人で作業していた時可愛いと思った栗鼠や蝶に何の感興も湧かない。大切な人を失った喪失感はこちらも次々と作者を悲しませるのであろう。

岡部千代松

作者は常に何気無い日常を切り取りながら、その日常の積み重ねが人生である事を気付かせてくれる。拔芳歌、ある年齢に達した人なら誰もが一度は体験する想い。それはいつであるかは個人差があろう。おそらく最近作者の読書量が減った。その事を自覚した時に生きる力の原動力とも言うべき三つの力の衰えを感じた。でも人にはもう一つ力が残っている。それは好奇心。作者の心はいつも好奇心に満ちている。私はそれがうれしい。わが息子ムーンウォーク練習しクラスで披露家族に披露

尾上 貴子

「ムーンウォーク」とは。マイケルジャクソン

のダンスの中でも代表的な人形の様な歩き方をするダンス。息子がそのダンスを練習し、学校でも家庭でも披露している。唯それだけの事なのだが、その中に流れている暖かい親子の情愛と価値観を大きく広げ伸び伸び子育てしている作者の生き様が見えて来る。不可解なマイケルの死は益々彼を伝説の人にして行くのだろう。

初孫の成長見たしと宜ひて黄泉ある夫よ今日は七夕

河口 礼子

夜中に自分は癌だと思った時、私は子供達の寝顔を見に行った。自分の死期を知った夫の初孫の成長を見たいと言った気持は私には良く分かる。もちろん作者にはもっと分かったであろう。だからこそ今日は七夕、願い事が叶う日だよ。初孫に会いにおいでと呼びかける作者の思いは深く強い。そしてそれは作者自身の会いに来いという叫びでもあった。

清しかる森に則あり愛ありて命の営みまた深きとう

工藤 和子

自然に法則はある。清々しく自然の豊かな森には当然その法則は生きている。そしてその根源には生命を育み慈しむ愛の連鎖がある。作者はその事を森の中を歩きまろやかな小川の音、森を渡る風、鳥の声、花の姿で実感する。しかし結句の「また深きとう」の中にそんな自然を蹂躪する人間の

エゴを告発する作者の怒りが隠されているように感ずる。

物の世に心を加へ人らしき文化を醸して後生守らむ

佐田 孝義

「後生」とは「死後ふたたび生まれ変わること。また来世」とある。(広辞苑)「来世」とは「死後の世界。未来の世」とある。(広辞苑)してみると後生とは、未来の世であり、死後の世界と考えて良いのか。結句「後生守らむ」は生きて存在する未来と来たるべき死後の世界の両方を人間らしく生きる為に守って行こうと言う事になろう。その要諦は物心の調和社会を築く事にあると言う。私も同感だ。

七月の大粒の汗流れ出し毒素吹き出て海へと帰る

鈴木美智子

面白い歌だ。夏の暑さで流れ出る大粒の汗。体内から流れ出る汗は体内にある毒素を吹き出すのだと作者は言う。私もプールへ行けば必ずサウナに入って汗を流すが、体内の毒素を吹き出すのだと思った事は無かった。暑い時に汗をかかなくなった現代人は不健康になった。更に面白いのは、汗は毒素と一緒に海へ帰るという発想。人間も又自然循環の一部なのだ。

人の世の傷み哀しく受けし身も茜はおなじ彩に染めゆく

月田 藤枝

「人の世の傷み」は誰しもが感じ受け止めて行かざるを得ないものであり、それは種々に及ぶ。今作者の受けている傷みの数々は、少なからず私にもかかわる。そして介護施設に一時的にせよ預けねばならぬ夫への思いにかかわる。しかしこの歌の美しさは、傷みを与える人にも傷みを受ける人にも茜は等しく振りかかり同じ彩に染めるのだと言う深い人間愛にある。

風のまに寄合ひ重なる波のさま青海波模様生みし古人

中村 陽子

「青海波模様」とは同心の半円形を互い違いに重ねて波やうろこ状の文様をあらわしたものの。舞楽の曲に「青海波」があり、波に千鳥の衣装を着る。源氏物語にも「源氏の中將はせいかいはをぞ舞ひ給ひける」とある。最も古くは七世紀の埴輪に見える。作者はその事を知っていて、古代人が作った青海波模様はきっとこんな波を見て考えたのだと想像しながら九十九里浜に立つ。作者の心の豊かさを思う。

頂きし賞の重たさ計られぬ吾に課さるる支部の存続

土方 澄江

作者は大磯支部の支部長をしておられる。大磯支部は「太陽の舟短歌会」発祥の母体となった支部。いわば太陽の舟の原点にあたる。岸田實なき後、谷河さんや善波さんや土方さん達が大切に

前々号 (297 号) 秀歌拔芳

守って来た。拔芳歌の作者の気持ちはそのまま私の気持ちであり、何があっても守ってもらいたいと願っている。私も微力だが助力を惜しまないつもりだ。

ペダル踏みそよ風受けて散歩道吾にも乗れし電動アシスト
堀井 英範

「間質性肺炎」とは肺の間質組織を主座とした炎症を来す疾患の総称で、非常に致命的であると同時に治療も困難な難病であると言う。美空ひばりもこの病気で亡くなったそう。作者はこういう難病を患いながら前向きに一所懸命生きている。電動自転車に乗って走れる喜びが歌一杯に満ちている。「乗れしは乗れり」にしたい。作者は千葉支部の人。支部歌会で言う。「この歌会に出て来る事が生きがいです」と。そして私達も作者から一杯力をもらっている。

白布におはれし顔「うそだよ」と言いたげに眼閉ちし口許
福地 啓子

上句と下句バラバラの様であるが、作者は白布の無い時の媼の死に顔を白布におおわれた上から思い描いているのだ。この歌の作りがより作者の媼に対する想いの深さを表現するのに効果的であった。上句で作者は媼の死を肯定せざるを得ない状況に置かれている事を表現し、しかし媼の口

の形から今にも死んだなんてうそだよとの言葉が出て来そうに感じられる。そのほかない願望が切ない。

コンビニの駐車場に列つくりハンドル台に昼餉の時間
森 五貴雄

現代社会の象徴としてのコンビニエンスストアとモーターゼーション。実際私もキャンピングカーで走る時はコンビニを利用するが、拔芳歌と同じ風景を良く目にする。大型トラックの駐車スペースはコンビニにしか無い。ほとんどの運転手はハンドルを台にして食事。ちなみに〇〇の問題で言えば、夜通しアイドリングを止めない道の駅、高速サービスエリア、コンビニ。放置はおかしい。

涛々とまた浪々と波寄する江差追分唯に聴き入る

山名 恒子

北海道江差で高校の教員をしていた友人がいる。彼は赴任中江差追分の会に入っていた。日本を代表する民謡の一つの江差追分。それは厳しい北海道の海の労働を抜きにして語る事は出来ない。ヤン衆（ニシン漁に雇われた人たち）の労働歌。だから、作者は江差追分の声調に波の音を聴き、波の音に交じって聞こえるヤン衆の悲しみを聴いた。旅は本物を見、本物を聴くチャンスでも

文語で短歌を詠む人のために(十一)

奥田 清

助動詞

鼓笛隊が、足並みそろえ、ラッパや太鼓を鳴らしながらにぎやかにやって来る。そんな様子を、

べくべからべくべかりべしべきべけれ すすかけ並木

来る鼓笛隊 永井 陽子

楽しく詠んでいます。やっこしい助動詞「べし」の活用も歌になればこんな味わいがでるのですね。

さて、文語で短歌を詠む人にとって、歌会でよく指摘されるのは、助詞と助動詞の使い方である。基礎基本をしっかり習得して、右の例歌のように自家薬籠中のものにしたいたいものである。

助動詞とは、活用する付属語で、用言や他の助動詞に付いていろいろの意味を添えたり、体言や助詞に付いて述語文節を作ったりする品詞である。

葛の花 踏みしだか^①れて、色あたらし。この山道を行き^②し人あり (釈超空「海やまのあひだ」) 〓用言に。

船べりに浮きて息づく 蟹が子の青き瞳は、われを見に^③けり (同) 〓助動詞に

乾鮭のさがり しみに暗き軒 銭よみわたし、大みそか^④なる (同) 〓体言に

右の用例の①「れ」は、「踏みしだく」カ行四段動詞の未然形について、「れる・られる」(受身)の意味を表わし、助詞「て」に続いていくので、活用形は連用形である。②「し」は、「行く」カ行四段動詞の連用形について「行った」(過去)の意味を表わし、「人」に続いていくので、活用形は連体形である。③「けり」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」について、「私をみたことだったなあ」(詠嘆)を表わし、末尾にあるので終止形である。④「なる」は、体言(名詞)「大みそか」について、(大みそかである) 断定の意味もあるが、短歌では、この末尾に詠嘆をこめて、(であることよな)の意味に鑑賞する。末尾にあるが、「ことよなあ」の余情を表わすための連体形止めである。

右の用例①～④で述べたように、助動詞は、「どういう意味をあらわすか」「どういう語に接続しているか」「どういう活用をするか」の三方面から調べる必要がある。従って、助動詞の分類も、①意味による分類 ②活用による分類 ③接続法による分類の三係累が行われている。

例の国文法要覧では、「助動詞の活用表」を意味中心にまとめている。この一般的分類の順に従って、私の稿もすめてみたい。即ち、(1)受身・自発・尊敬 (2)使役 (3)打消 (4)過去 (5)完了 (6)推量 (7)打消の推量 (8)希望 (9)断定 (10)伝聞・推定 (11)比喩 (12)継続 の順に述べることにする。

追悼

金子泰太郎さんを偲ぶ

土屋 道子

金子さんが遠い国へ旅立たれてしまいました。訃報を受けて私の心の中に一番先に浮かんだのは、平成十三年の新年会のことでした。喉頭癌で声帯を失われた金子さんは、真剣なリハビリによってお話が出来るようになったのです。大変な事だったと思います。歌会にもご自分で意見を述べられました。大雪のあの新年会、長靴で出席なさった阿部先生は壇上で金子さんと並び、その努力を激賞なさったのです。金子さんは「両国は自分の育った所、そのホテルで先生のお褒めを戴いた事はとても嬉しい。」と皆さんに解るようにお話をなさったのです。全員の涙の拍手、本当に良い新年会でした。

金子さんが「太陽の舟」に入会なさったのは平成六年頃國學院のオープンカレッジからいらっしやったのです。いつも身近の出来事を暖かい心で見守り、私たちに気が付かない様な事なども清らかな優しい心で詠っていらっしやるのです。本当に良い歌で私は大好きでした。

或る日私が差し上げた手作りの和帳を開いて見せて下さったのです。そこには金子さんの短歌がずらりと毛筆の金子さんらしい几帳面な文字で書かれているのです。私は嬉しくて涙が出ました。「この続きが書けるように、又作って差し上げますね。」と申したのですけど、私の体調も悪くなり、金

子さんも逝かれてしまいました。

金子さん、どうぞ安らかに良い短歌をお詠み下さいませ。
御冥福をお祈り申し上げます。

金子氏を悼む

伊藤 英一

訣別の握手も固く二年経て逝きしと聞けり09年夏
穏やかに喉頭癌の裏声で譏る言葉は言はざる金子氏
適格に要旨捉へし批評には身を乗り出して耳かたむけり
入脱会を同じき年に共にせど交はせし言無き十年なりき
当、不当呼気のみにての歌評をば数して息まず悼み更なり
その心魂のやさしさ故に語らひの折もなけれど忘れ得ぬ金子氏
踏み出すその足先の雑草の花さへ愛でて避けりとは聞く

金子泰太郎氏遺歌十首

咽頭を失ひしのちの日のことをベットに起きて一人考ふ
司会者はわれのメモをば朗読す申訳なく思ひつつ聞く
てのひらに館を広げて飯包む妻の手つきに亡き母をみる
一升と米つき棒を前にして祖父はくはしく孫に語れり
空襲で家が焼けても保障なしたった一枚の罹災証明書
花を咲かせ枯死する定めぬ竜舌蘭の空に簪ゆる花茎を仰ぐ
わが母と弟を先に逃がしたり空襲のあと捜せど逢へず
それぞれが別の方向を眺めてる紅葉をゆくゴンドラの中
ファールブルの愛用したる黒い帽子「忘れしました」とりにくるかも
背中丸め袖ひるがえし前のめり「風の中ゆく芭蕉」の木像

追悼

二〇〇九年九月十二日午前九時塩見岳

吉田 昌夫

九月十三日、朝刊の千葉版を見て小さな声を上げた。そして、ええつつ 嘘だ、と大きな声を出した。新聞には、前日の午前九時ごろ南アルプス塩見岳で千葉市の藤井武徳さんが、急に体調不良を訴え、近くの山小屋に運び込まれたが死去とある。程なく丸山さんから電話がかかる。丸山さんは藤井さんの元選挙参謀。丸山さんも詳しいことは分からない。松岡編集長も、二日前「太陽の舟」の七首詠について電話があり、その後これから山に登ると、元気に言って出発したらしい、と言うだけ。とても亡くなったとは思えない。

藤井武徳さんは、三十年まえ、千葉市議に立候補した時から応援している。「ばりばりの黨員で、私とも張り合って良く頑張った」と通夜の帰り、今も市議を勤める西巻義通氏が早い死を惜しむようにつぶやいた。収賄で辞職した前千葉市長を以前から許せないとして、市議の任期を二年残して市長選を争ったが敗れ、以後は政治を退いた。三十年に亘る千葉市議としての活躍は市政史に名をとどめるであろう。

現編集長の薦めで「太陽の舟」に入り短歌を始めて後一ヶ月で二年になる。亡き友の「日本百名山を踏破せよ」との遺言を守っての途上であった。おおよそ六割を登ったという。歌人として、山の歌を歌い続けた、義の人、勇の人、直の人、

誠の人であった。いまも、いやあのね、と親しげに話しながらその辺から現れそうな気がしてならない。

藤井武徳さん

松岡 三夫

親しげな声なほ耳に響くなり武徳さんはまだ生きてゐる義を叫ぶ武徳さんに出会ひたる三十年前嗚呼あの日かな死してなほ生き続けるや藤井さんその足跡消ゆることなし

藤井武徳氏遺歌十五首

甲斐駒に向かい亡き友の名を呼びてやっときたよと手を合わせつつ手を合わせ甲武信岳の神感謝する全ての命守りたまえよ
七十余聖地への旅全て終わり地球再生願ひよ届かん！
未熟児で生まれし吾が槍ヶ岳頂に立ちて母より難う
武尊山すべての神が集まりて地球の再生祈りは続く
木道に座りて見るや火打山花と水あふれ優しいひざし
千年余時空を越えて空海の想い伝わる高野三山
紅葉の安達太良山人々の笑顔はじけまばゆい青空
心地よい風吹き渡る乗鞍の高原バス喘ぐが如く
残雪の水溢れつつ新緑の鬼怒川に声乗せ舟はゆく
初夏の風うけて乗鞍残雪を背に青空見上げて一息
湯につかり想いめぐらす山多く登りし意味を問いかける吾
爺と散歩一年半の孫娘靴を履きつつにっこり笑顔
母のため曾孫七人楽器にて米寿祝う笑顔満ち溢れ
名は「春奈」父は「大造」母「佐江子」姓は藤井と申します はい

作歌の目・作歌の技法(第五十八回)

あかたい
縣居の杜の中で

三木 勝

縣居の杜は、浜松にある。遠州鉄道路線バスの浜松商工会議所前停留所で降りると、灯籠坂という急勾配の坂がある。灯籠坂の下には、賀茂真淵生誕の地があり、顕彰碑が立っている。顕彰碑の前には、『万葉集遠江歌考卷第一』の銅像が、ひろげた形でかたどられ置かれている。縣居翁つまり賀茂真淵を祭る縣居神社の杜はすぐその上にあり、樹木が鬱蒼と茂っている。急勾配の灯籠坂を上ると瀟洒な縣居の杜の中に縣居神社があり、真淵記念館がある。

浜松市の歌・市歌の作詞《作歌》は、森林太郎つまり森鷗外である。一番歌《大宮人の旅衣 入りみだけけむ 萩原の 昔つばらに たづねつる 翁をしのべ 書をよまば》冒頭部分は、万葉集卷一「引馬野ににほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに」を踏まえている。《翁》とは、万葉集を研究し国学を形成した賀茂真淵のことである。

二番歌《引馬のうまや さまかへて よろづの業の 進むなる いざもるともに 謀りてむ わが浜松の 市のさかえ》引馬のうまやとは、浜松の宿駅のことで、『十六夜日記』には「引馬の宿といふ処にとどまる。このところ大かたの名を浜松とぞいひし」とある。この市歌は大正十年七月市制施行十周年を記念して作られた。それからほぼ一世紀、「よろづの業の 進むなる」は、「いざもるともに謀りてむ わが

浜松の 市のさかえ」は、文字通り見事に開花した。世界に誇る産業は、数知れない。ヤマハ、カワイは、世界二大楽器メーカーであり、世界のトップを行く。この為、世界的な音楽祭が浜松で開かれる。ヤマハ、スズキ、ホンダの発祥の地で工業デザインの街ともなった。

テレビジョンを発明した浜松高等工業学校高柳健次郎の教え子たちは、浜松ホトニクスを創業し、その技術は世界に誇っている。戦時中、軍需産業の街・浜松は空爆・艦砲で徹底的に破壊された。一九四八年には浜松事件が起こり、在日朝鮮人と在日日本人、浜松市警とが三つ巴の銃撃戦状態となり、多くの死傷者を出した悲しい歴史も秘めている。

いかに知識を積もうとも、知識は、何のために自分は生きているのかを、腑に落とし入れることができるほどに、説明しない。腑に落ちるほどに、人が納得できることは、知識とは別の領域にその機能があるようである。

何のために自分は生きているのかを、腑に落とし入れることができるほどに、納得できるようになるためには、人は、自分の心を旅しなくてはならない。歌を作るということは、自らの心を旅することである。人の心を旅させる短歌には、何のために自分は生きているのかを、腑に落とし入れることができるほどに納得できる世界へと、人の心を導いていく力を秘めている。賀茂真淵はその種を浜松に蒔いた。人口八十一万人の街に大学が七校、専門学校が二十九校もある。心を旅する真淵の力は、浜松の心となり力となり、浜松の礎となった。

あがたい

縣居の杜の美しさを堪能し、帰路の電車の中では国学と近代日本のことに思いを巡らし、過ぎ行く景色を眺めていた。最近読んだある自分史の事から、日本の近代の文化について考えていた。自分史は私小説の世界へと繋がる。私小説の世界は明治期の自然主義文学へと源流をたどる。その基となったヨーロッパの自然主義文学は、科学的な手法を文学に取り込んでいくものであった。「ゾラの小説は、第一に、生物学的方法をふまえ、第二に、広大な社会的な視野をそなえ、したがって作者その人を主人公とはせず、第三に、市民社会を対象とする」(1)

「しかるに藤村や白鳥等の仕事は、以上の三点を全く欠く。科学的方法とは何の関係もなく、——十九世紀末二十世紀初めの日本には科学主義はなかった——、小説の世界は極度に狭く、作者身辺の雑事に限られ、しかも主題は市民社会内部の矛盾ではなく、市民社会の未成熟にもとづく紛争を主としていた。」(2)「しかし日本の小説家は、誤って『naturalisme』という言葉で翻訳した。フランス語で言う『naturalisme』の『nature』は、自然科学の対象の自然であって、日本語に訳して『自然主義』というときの『自然』のように、『あるがまま』『無作為』『無技巧』ではないし、また独歩がその言葉で意味したような『天地自然』、汎神論的な『山水』都会ならざる『田園的なもの』ではない。花袋の『自然主義』は、逍遙の『あるがまま』を大胆にし、独歩の『自然主義』は武蔵野の四季である。日本語の『自然主義』という言葉は、そういうことを示唆し、フランス語の『naturalisme』とは何の関係もない。」(3)

ヨーロッパの自然主義文学は①科学的方法、②広大な社会的視野、③市民社会対象の三点を備えている。科学には、自明にもとづく証明・論理的展開がその根底にある。広大な社会的視野には、その視野を生み出す構造的歴史観つまり未来をもすでに歴史の一部として取り込んでいく視点が含まれている。そして作品の中の主人公は作者その人になることはなく市民社会の中で描かれていく。自分史は自分が主人公。自分の視点・自分の位置から描かれる。

しかし自分史には前述の三点はない。歴史を描いているように見えても、そこには未来をも歴史の一部とする『歴史』はない。自分史であるから『史』を描いているが、そこには『歴史』はない。自分史の『史』は過去の自分の時間の集積である。その世界では歴史の未来は描けない。しかしその世界で自分が経験した間違いない、譲れない何かを把握する。この世界把握の手法は日本文化の手法であり、その源泉には短歌的技法がある。科学的技法と対を成して、この手法も重要である。瞬間の《今》・現在の感動・認識から世界を把握する短歌的技法は、狭隘な私小説の世界を越えて、普遍に至り、意識の深化へと導く。国学には神話と事実の歴史を混同するという学問的な弱点はあったが、瞬間の《今》の感動から世界を把握し狭隘な私小説の世界を越え、普遍に至る短歌的技法は、確実に手にしていた。

(1)・(2)・(3) 加藤周一『日本文学史序説下』筑摩書房
昭和六二年初版第十四刷 三八三頁—三八四頁。

歌帖余白（七十一） — 編集雜記 —

松岡 三夫

墓碑銘

Swift has sailed into rest. スウィフトは休息に入った。
Savage indignation there そいつでは激しい憤怒に
Cannot lacerate his breast. 胸を切り裂かれることもない。
Imitate him if you can, じやなんことなら彼を真似てくれ、
world-beesotted traveller. 世界に夢中になっている旅人、
He served human liberty. 人間の自由のために尽くした

この男を

この墓碑銘を自らラテン語で書いたのは、『ガリバー旅行記』の著者で知られているジョナサン・スウィフトです。

墓誌銘で痛快なのは正岡子規の田端大龍寺にある「日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十円」です。月給四十円は愉快きわまりないが、それほどではなくとも、スウィフトの碑銘もなかなかのものです。

ジョナサン・スウィフトといえば『ガリバー旅行記』を書いた小説家というイメージがすぐ浮びますが、彼は一六七七年十一月三十日ダブリン生れの英国系アイルランド人の司祭、風刺作家、随筆家、政治パンフレット作者、詩人でした。スウィフトは恐らく英語で第一流の散文による風刺作家でした。が詩文によっては余り知られていない。彼はまことに多

作な作家で膨大な文章を書いたが、いくつもの筆名または匿名で作品を発表しました。最近の散文作品集は十四巻、全詩集の近年版は九五三頁、書簡集は三巻に及びます。

スウィフトの著作の主題は、大概彼の人生における出来事や関心事を辿っています。最初期の作品からは、彼の人生における哲学論の学問的興味を示しており、聖職者と陳情者の双方としての教会との関係に移り、次いでその筆をトーリー党に向け政治的問題に転じ、そして最終的には、アイルランドの人々の問題を取り上げたのでした。順を追って大きな作品を拾っていくと『次なる年の予言』『ドレイピア書簡』『穩健なる提案』『ガリバー旅行記』『桶物語』『書物合戦』となります。

（現代のヨーロッパでは）「人民が飢餓で弱ったり、疫病で衰えたり、党派できな対立のために混乱に陥ったような場合、その国を侵略しても、これはきわめて正当な戦争理由だと考えられている。・・・またある君主が、貧しく無知な国民に對して兵を進めるような場合、たとえ彼らを文明にみちびき、野蛮な生活状態から救ってやるためなら、それともかまわない、ということになっている。」（ガリバー旅行記）

一七二六年に発行された『ガリバー旅行記』は、しばしば子供向けの本と誤認されてきたが、大いなる時事風刺であり、厭人的な人間性の解剖、冷笑の眼鏡なのです。

詩歌にも大いなる風刺をときには詠まなければならない。政教の邪正をただし王道の興廢をしろる道（二条良基）

歌会報告

本部歌会 9月例会(第356回) (角田記)

日時 9月12日(土) 13時〜16時45分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 原田 寛同人

出席 29名 出詠 31首

今日は朝から雨模様となりましたが多数の方が出席されました。

三木勝企画広報部長よりの朗報がありました。インターネットに10月1日より、「たんか 太陽の舟 短歌会」とアクセスすれば、ホームページが見られます。楽しみに待っていて下さい。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・鉢植ゑのわれの山椒食べにたべ楚々と変身紋白が舞ふ

山田田鶴子

・虫の音を共に聞かまし真夜しばし金子氏の魂 飛翔する前

中村 陽子

・コスモスに天上風吹く小海線ディーゼル一輛くさむら走る

山名 恒子

・渋谷支部 支部長／志賀 倭子 (河野記)

日時 9月12日(土) 10時〜12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 河野 静子

出席 10名 出詠 10首

朝夕は少し凌ぎやすくなりました。土屋さん欠席、他全員出席です。

元支部会員の金子泰太郎氏「八月二十日 御逝去」此処に、御冥福をお祈り申し上げます。

・ペランダより江の島花火の大玉の消ゆるたまゆら亡き友の笑み 中村 陽子

都野澄子さんのことを詠まれたのですが、亡くなってすぐの歌ならとの、ご意見もありましたが、金子氏がお亡くなりになられたので：都野さんを偲べたのだと思います。

水戸支部 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 9月12日(土) 13時〜16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 9名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

場所が選挙に使われるかもしれないと土曜日に短歌会を開催した。長須先生のミニ講義は、学者であり歌人でもあった佐々木信綱の歌を勉強した。「ゆく秋の大和の国の……」はよく知られている。続いて歌会に入り12人それぞれの歌材が生活から出たものであるだけになかなか良いとの先生のご感想。

・沈まざる陽を気にしつつ立話夏の日暮は長すぎるから

福地 啓子

水戸支部 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 9月20日(土) 10時〜12時

場所 岩間公民館

出席 6名 出詠 10首
司会 深谷 充代

秋の空気の拡がった岩間での歌会。忙しい日々ながらも集中したひととき。先日、白州正子の放映があったがその中で陶芸でも絵画でも完成品よりもその過程がおもしろい、結論を言ってしまうのはダメと。作歌にも言えるかも。
・傾きし真紅の太陽横ぎりて何鳥^{なにどり}ならむ群れて飛びゆく

柏支部 支部長／末次房江

日時 9月18日（金） 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 11名 出詠 22首

司会 山田 紀子

柏支部では、八月が休会だったので、待ちかねたように22首の力作がそろった。一首づつに丁寧な歌評がかわされた。その後、岐阜の吟行会について説明があった。

・わが町に稔りし新米こしひかり贈らむ人を思ふうれしさ

富永 道子

・ひのひかり集めて畑に実りたる茄子の紫紺を手のひらにのす
深谷 幸子

千葉支部 支部長／原田 寛
（渡辺記）

日時 9月19日（土） 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森 五貴雄

出席 13名 出詠 15首

9月12日、千葉支部会員藤井武徳氏が登山中に急逝されました。山男で「太陽の舟」にも毎号、山に思いを寄せ心傾ける歌を寄せられています。一宮での全国大会にはマイカーで参加して手助けして頂きました。一同黙祷を捧げ御冥福をお祈り致しました。

歌会是一首一首丁寧に見え交換、しかも和氣藹藹、充実感に充たされます。高得点歌です。

・満月の耀ふ森に猪の声響かひて影深みゆく

高崎 邦彦

・丸囀の母の写真と仏壇に見る遺影との距離の深遠

村田 一江

出詠歌は「距離の悲しさ」でしたが表現が大まかであるので、推敲例として。

・政十一号の風よりも大風吹きて八月は近く

木村 重夫

政変に関しての歌は三首ありましたが、事柄と自分の主張を歌う時事詠はなかなか難しい、というのが実感です。

訃報

金子泰太郎（旧渋谷支部会員）八月二十日 御逝去
藤井 武徳（千葉支部会員）九月十二日 御逝去
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

太陽の舟短歌会

川村 貴美

若き日は出来ずに居しを公然と妻の手をとり歩きし晩年

これは七月のきゅりあん歌会に三沢誠之助氏が出詠なされた短歌で高崎先生も採っておられました。現今の若い人達の間では屡見受けられるのですが、私達の年代では…… と思ひ出席者三千何名かの方々に訊ねました処、手を挙げて下さったのは僅か四、五名でした。どう考えても私自身そんな記憶は無いのです。夫婦で出かける時も、妻は後から従いてくるものと信じてずんずん歩いて行ってしまいます。背丈が二十糎も違うので感覚はどんどん離れ、時々走って追いつきません。

この間、有楽町の国際フォーラム、行つての帰途東銀座まで地下道を歩きました。地下道というのは柱が太くて時々主人の後姿を見失います。人込みの中三、四段ある階段を昇り降りし走りかけた時転んでしまったのです。立ちあがりましたが右膝から血が流れ、慌ててティッシュをバッグから取り出した時、後から来た二十歳代の青年が、バンドエイドを三枚、どうぞと手渡して下さいました。血をふきとってバンドエイドを貼ってましたら今度は中年の紳士がバンドエイドを下さいました。次にティッシュを手渡して下さったご婦人もありました。主人は十米も先の方から振り返り戻って来ました。手を繋いで歩くなんてテレくさい、でもせめて私の歩幅に合わせて下されば有難いと少々恨み言を言いました。

それにしても、私が転んだ時直ぐ様バンドエイドを下さった方が二人もあつたのです。世の中用意のいい方がいらっしやるものです。私もこれからバッグか財布にバンドエイドを二、三枚は持ち歩こうと思っています。